春岡村の伝説

・・春岡村に伝わる物語六・・

さて、今回は春岡村の銭場佐一郎さん（明治三十四年生まれ）が聞いた、六部のおはなしです。

●六部田（ろくぶでん）

六部田は、深作と丸ヶ崎の境（丸ヶ崎堂波の前で、深作西谷耕地と丸ヶ崎字本村との間、ちょうど以前あった湯の郷の裏あたり）にある田である。この田についてはこんな話がある。

今から何年位前かは知れないが、どこからともなく一人の六部が深作の原にあった源法院（廃寺）に来て一夜の宿を乞うた。ところがこの寺の住職は無情にも

「ここはお前とは宗旨が違うから、泊まるなら丸ヶ崎の多聞院に行って泊まれー。」

といって追い出すように謝絶したので、六部は切角の望みも絶え、スッカリ落胆して暗い夜道をトボトボと杖を頼りに教えられた道を歩いて出た。

ところが、丁度この田のところに来るとどうしたことか足を辷らして落ち込んでしまい、とうとうそのまま絶息してしまった。

こんな事があってから、誰いうとなくこの田を六部田というようになった。

現在でもこの田の耕作者は、深いので困っているようである。昭和四年頃までは、この田の近所から、六部の霊に対する供養のものだろう、墨痕鮮やかな、長さ五尺位の丸棒の塔婆が出たものである。

六部（ろくぶ）とは六十六部の略。「廻国巡礼の一つ。書写した法華経を全国六十六ヵ所の霊場に一部ずつ納める目的で、諸国の社寺を遍歴する行脚僧。鎌倉末期に始まる。江戸時代には俗人も行い、鼠木綿の着物を着て鉦を叩いて鈴を振りあるいは厨子を負い家ごとに銭を乞い歩いた。」（広辞苑より）

出戸橋の近くにある丸ヶ崎観音堂境内には造立が一七一三～一八一九、約百年間に十六の供養塔等がたてられました。そのうち六部の供養塔と思われるものは七基あり、この頃全国を廻る六部がたくさんいたことがわかります。これらの六部は名主の家に逗留して各家を托鉢して歩きました。この地（丸ヶ崎村）で亡くなると名主が供養塔を建てたようです。

源法院は深作の西部字原、現在の覚蔵院の裏で見沼代用水の南側の少し西によった凹字形のところにありました。明治2年、住職が帰農したため廃寺となりました。

平山 由喜

出典・・・出典・銭場佐一郎『思い出の春岡』（図書館蔵）
写真・『幕末・明治の生活風景―外国人のみたニッポン』より

六十六部 - - - 六十六は日本列島の国数で、それぞれの国の霊場に書き写した法華経を一巻ずつおさめるために行脚する。はじめは僧のみだったが、江戸時代には俗人もおこない、図に見るような厨子を背負い、家ごとに銭を乞いながら歩いた。かぶっている笠を六部笠といった。